



■断熱リフォームで心がけたこと①

夏の涼しさ対策

日本一こそ岐阜県に奪われたものの高崎は熱帯地方と思えるほど暑い夏が続く。高断熱住宅にすればクーラーが効きすぎるほど良く効くことは知っていても、クーラーにたよりすぎない家をつくるのが(株)アライの方針。そのコツは夏の風方向(風向)を知って窓を付けること。できれば腰屋根をつくり上下の通風をとること。そして直射日光を室内に入れないことである。

写真④は西側壁のランマ部にあたる場所。もとは何もなかったが、小さい開口部を設けた。しかも天井付けにすることで、天井面にこもる熱を排除しようとする考え。これは、これまで新築の家で幾度も試みてきてその効果を確認している。



写真⑤: 軒の深さ1350mm 1階の軒の出は冬の日射取得に支障ない程度にギリギリ深くとっている。寸法にはこだわらない。南面は犬走りがあったり写真のように石を敷いたりするケースが多い。夏は、そこからの照り返しが思いの外きついのだ。とにかく深くとることが結果的にクー



■断熱リフォームで心がけたこと②

室内の明るさ

リフォームする動機を列挙すると古い、寒い、暗いの要件が上位を占めるらしい。

今現在、築30年くらいの家はたしかに仕切られた間取りが多いから暗いし、断熱など考えられもしなかったから冬は寒い、そして、設備が古く傷んでいるのは当然のことである。

設備は新しくすれば解決する。問題は明るさである。間取りを基本的に変えなければ採光が大幅に変わることはない。かといって大きな空間をつくれれば今度は冬寒いし暖房費もかかる。



そう考えてみると、断熱改修こそ現代のリフォームに絶対条件で必要に思えてくる。断熱するから大きな空間も可能になるし大きな開口もできるのだ。

〇邸では、開口部を断熱サッシに変えて、面積を増やしたことも明るさ計画の一つだが、室内を無垢板の腰壁に白い漆喰仕上げを基調としたが大きい。その結果、やや

■断熱リフォームで心がけたこと③

断熱の強弱

前号、壁の断熱は既存の10K品50mmをそのままにして、気流止めをすることでその性能を復活させ、外壁合板外に32K品高性能グラスウールボードを付加断熱したことに触れた。この2つで高性能グラスウール100mm分断熱程度と推測される。

この住宅は天井断熱である。天井下地を新規に設け防湿気密シートをしっかり施工し吹き込み用のグラスウールを350mm施工した。

ブローインググラスウールは壁に入れる高性能品に比べると性能が4~5割劣るので同じ厚さというわけには行かない。それに、吹込工事は、材料費よりも機械搬入の方に費用がか





■断熱リフォームで心がけたこと④ 耐震改修

宮城岩手、青森と最近日本列島が揺れている。中国四川省のような住宅ではないと知りながらも、築30年の住宅に住んでいれば、やはり地震に対してどうなのか心配である。ここでは、可能な限り耐震金物を取れ付け、壁には全て構造用合板を施工し耐震性向上も同時に



■断熱リフォームで心がけたこと⑤ 「らしさ」を出すこと

漆喰の白壁に腰板、一部、柱が見える真壁。これがここ数年ですっかり定着した(株)アライの家である。特別な要望がなければアライではこのデザインを標準としている。もちろん漆喰仕上げを支えている左官職人が備わっての話だ。新井社長は「我が社は漆喰の職人さんに助けられています」といつも口にする。

中抜きという塗り壁の下地、防水層に通気胴縁を施工して柄板を張る。サッシ周りに見えるようなこんな手を掛けた方法はプレハブ住宅にはできないだろう。防火上ダライトを施工した上に腰板を張る。付け土台、付け柱なども大工の技術である。

明治維新の頃、日本の住宅は紙と木と土できていると評されていたことがあるが、言い方を変えれば、経師屋と大工と左官職人が技を奮ったということだろう。

(株)アライの家はそれらの伝統技術を継承して、まず「ルックス」で「らしさ」を出している。その上で、高断熱の住み心地を知って欲しいと考えている。



真夏の住み心地を施主は何と言ってますか？と電話したと